



淡々文集卷第三

目録

- 一 田九郎云清子婿の酒徒評
- 二 守氏と其等の奥書
- 三 春棠窓の詠
- 四 雑詠 十二章
- 五 病中倦夜
- 六 挽詞 竿林、をす
- 七 青錦堂の紀并道行
- 八 幸化ふきたる文



九 流斜を人へく手紙

十 其舟より其葉を擲る事

十一 宮泉の極る先考体計

遠志のこころ

十二 白拍子能経續

十三 大圭碑文の文

十四 間暇乃とる事

十五 頼光綱子令れを後画の續

十六 松八のきし傳る事

十七 松雪くは事

十八 武陽渭水へをス

十九 阿保院の画乃續

二十 在せ成子孫の修文

廿一 報信四章 并 吾答

廿二 十七回小絶る事句

廿三 勸學子歌

廿四 嗅洞亭小絶る事

廿五 戸田氏三回忌集之序

廿六 妻小おろける人の許へ了る事

廿七 林外老人へ贈る事

廿八

後東亭

廿九

野人へはふり信

三十

小舟天神を納の返

第一 佃村九郎云流小僧

酒徳辞

古記云
わさたけ
指のるる
五郎書
佃ウツリタ
 老人あり雲哉幕トナリふし高雨月をそ然し堤
 をカシロ岸よりそ花を成哉。心の如く小朝夕をも
 所そ治世の中乃治を承そのなり。武功の余光を頂
 き子孫の口ををかくはこた流うた。逢くくけはて
 ち才ハ法々り田乃里の暮秋を又て志かち屋暉。
 起ると看と。夜そえてら又看む。解時ハ川風平吹
 まさむまは静よ盃哉。さの法きめくさ家
 獨乃夕アハき如を脱キ是をそよして石船く空

なりよは福く。んぬれ人折あへて茶碗を出入。
此いし私をとうとよあこひ散るかいらを教き三
盃と又六盃をみ流う。強ひて作う。冥きて。神
風乃いさらよう。曲しぬんう。君子れ道も佛の教
も。心裏おの流う。体う。ねむ。誠子阿う。さき老
乃張ひ

おといよ
ほのして
んをやるふ

心をやるやあふ志うぬやと

平之實う。ぬ人のとの業。実老人のうへさう。劉
伯倫 ヤロトキ 拵を左右の味方と形して。程確を又看む。
一人は白丸う。と米とのふ志く。抱をた

分二 守武志學之真書

六波羅密寺のむよりよと流き米とつふ。津河あり。常に古
人乃るれ。癖をそんへ世に埋る。古人の巻をある
り。了事。間平。後と入。人い。老。張。秘。良。ち。本。の。小
式紙よ。句。年。向。人。う。を。お。し。く。室。と。と。を。あ。は。
予。是。我。を。め。え。者。一。刻。と。と。と。第。一。時。を。く。
今。角。倉。乃。文。庫。ふ。と。し。り。西。本。の。う。う。佛。塔。の。是。也。
ち。り。さ。り。け。こ。武。士。乃。心。も。和。く。く。屋。き。一。物。之。き。う。と
事。的。庵。徳。く

分三 春崇へ遺す窓の銘

分三

〇四

高野
園略語

高野北窓下。自謂羲皇上人と。清風の来くる不

嘯きうそひく蕨葉拂くを所む。後人陶窓

と評てうやみうやむ。羨まざるものたり至る。

飛簾孔
窓ノ名ナリ

屋上子飛簾孔を云む別あり。天地怒る時吹

怒於土囊之
口風賊

草花葉のゆるかき。地洞不さくぬくこと其の元

名れ妙くた日も吹。流たぬやうなる文書に吹く

して日高き夏乃氣をよさんと好むをうそむ。

よさんと氣ふとの氣おとへん涼しかり。忽ち其の

日乃氣をよし是れ又して夏日子遊ふを其業之。屋

屋卵窓ハ
屋根ヲ切リキ

卵窓と名付るものを作り日く故人を能く保く

窓明名ヲ
彩ニ号ク

この花

涼しさの富貴を来さう松乃花

首了侍り志我幸す

寺四報話

一蒼顔す又字を教へる。語今飛来たる一字もよ

む事あるは別々の邪をうして飛来へし。手録も

先祖を敬るを道とて録れ文字細工を繕うての情

日すすす和漢おもむきの自中を感し墨を成す

てそ道は日我空しくせる者八眉を擧めて能きと存之。然

とも風物のかきひ深うし如人の手記を頼りしは

ふもつたなきもよ。自慢をいひあつて守守しく涉
り。同じ謝罪、謝画をすへしなといへば、侍輔もその氣兼
好もよあつと拙なうとをいへば、すすともを中弁うるといふ。
傍人よま時、危すも同家の事、あつて尋道、咄し、世の
事と笑ふ事、之非也。重く、漢先生を能書の名、有る人
かりし、うすうすうり、そのをいひて、今て下れ、名、す、八、徳、
也、又、ま、一、初、の、侍、従、を、なん、その、う、一、字、を、を、能、書、一、ん、と、か
り、又、ま、の、道、理、を、一、り、と、を、ま、り、と、さ、る、り、の、明、く、も、有、じ。
流、段、間、を、を、見、て、甚、怒、ふ、へ、一、や、大、笑、あ、り、う、う。長、夜
腹、淋、く、厨、飯、あ、り、や、や、ア、僕、を、有、り、依、り、菜、有、ん、と

ア、カ、有、と、云、何、つ、と、ア、九、年、母、三、つ、あ、り、と、云、世、を、説、
す、と、も、お、と、り、つ、と、又、大、笑、
一、東、坡、の、絵、の、工、ま、も、字、達、う、画、一、も、晴、ふ、あ、ひ、う、と、と、
一、光、悦、生、涯、の、心、を、た、と、甲、也、友、國、仙、延、山、長、廊、下、れ、新、口、の
額、す、て、お、と、い、い、あ、つ、り、つ、と、通、長、ノ、二、字、あ、り、
一、と、ま、ふ、何、の、事、を、と、う、や、と、ま、ま、魔、大、海、す、て、お、り、と、と、
九、年、面、壁、と、て、尋、志、名、僧、和、漢、お、と、も、習、ち、く、何、處、か
念、し、く、も、愚、索、大、悟、の、神、九、年、の、月、壁、お、む、む、い、て、尻、を、腐
ら、一、悟、す、と、う、ら、あ、つ、て、不、善、用、な、を、お、と、ま、九、念、面、壁、如
死、ん、と、念、一、念、而、悟、如、法、禪、一、二、三、と、念、し、て、二、念、お、り、と、

と榮華此恒情なり教乃要主也一棧九念して向ふ
 壁ふても窓あつても窓あつても栢樹子ても海も山も此
 時の心の的なるをさるゝ二種の的を捨て教年暗るる衆
 を放さんとも又昔の衆の像として其の衆よ衆なりとも
 日月痛きお柳葉そ急流舟の一名也川上の観念
 溝不見性成仏天國の虚名ならん澤庵も其急流
 瀕す。至處難信とは尋老れ心甚をうく穢りたる
 一古賢禪師海下光中も達を責るありとも事
 一首義士有り其妻の持る扇として骨を立り掛おして
 秘花きくを足傳ふおつとの手紙よく「はくめも絶死

古賢南紀
 人之海印光
 ヲ作

おとしよありまわりとらふうこれせま何き外その比乃
 日くつてもかへた事之切なり心を感し傳りたり
 一英一棟りまわらる後水の流るるとり大笠ををんたる坊
 と此跡^{ウツキ}有る所の後不^{ウツキ}賢ををん云人あり予云きハめて柳
 一本寺原らんといへん燈小をりつらう一見道を道のへふ
 清水流るの西の徳有り時ふさ事あり下御玉芦
 神と云ふなり今も柳あり古跡と云。新柳の時足傳り
 燈小人年時五の心ハハう、事ありや東北判ふる土佐家
 へ伝をハされり是も昔杉戸の徳なり檜麻をかきしる官
 女をす事ありや答ありたりと見て此事ありと云

折竹ふるふ土依家の苦へもたうらささうり仍て贅の
 事防了とを 通のふ清水流るく柳陰志うり
 とを立と有りつを 獨行潭底影。數息樹邊身
 賈嶋々自愧の句ふ叶へて道の入り奇と新たなり
 あり

一つの法ん声神度へあるとを女の交仕お返りして
 こと路中勅て教へゆり時法師ともいふ具ありて
 の方名をとりあつて是れをききよを何ありうれと女と
 何と志うりしてとをききよを何ありうれと女と
 とを立と有りつをととをききよを何ありうれと女と

一茶を信する人云茶ハ三つ置かせて折あをいふやうふ
 術を畫して三三百番の外なり二つ置て六千置ぬ
 王先互先を扱つりうりうり方量形一思りうり不備此中
 とそかくと一人あり又其茶を云はぬと論あり神に世下の事
 一扱扱ふまうてあ皮と泥道と称するのうらふふ
 る人あり當時茶千おあてハ仙ト也是は對するとの
 宗通の泥傍言名を是は答へてとやさねうり仙トお
 悔さるても不慌又ねうりては後もくくは其境の遠
 ひるらう人のなり風雅の上を黒白とちまらふなる
 ことのうらあり一茶を一人の上をを懐テん其格に

日冥時うまふとわたりて下す二三とわらぬ心
 風雅の務方まうちたよなるおみあらし一美人を
 壓千人を感てしめてもわら神さし下すも一家者
 流をうら上もやと遠くをせわひくして月雪花杜宇
 をくみみつううをを忘るるものなり上も必衆
 口金をうらしけり下す近しそ道水鏡してはくは
 時と牧葉う書したるうく回ふ髪や容を白をうち
 黒を返すもを早し一人をうらまはくはつては同雅
 の中まふあらし神急す叶ひ鬼神を感てし病
 魔を退き雨を初る名を以園を通り悪夢を托

ふ是男神急す叶ふ成る人し故ら飛子の有る心配
 子に飛子配まてん神急す其態のつりまふあらし風雅
 ハ心氣のけうち小空心有意をむすひつり氣と心は
 たくうひよく務めを佳句とかり心と氣相和の時地
 乃句と急りの色心小氣の中けうの時急あし佳句と地
 也路あらし急ふあらし相を下すと急へし一称急の急候
 を心けうへし急も上も下もあり
 一昔仏ま屋の大き上流の時さううの家
 いつし百ふつをみし花のまわしるす
 ずんびくいり桶とぢの巻

此一丁一真を古くあり歎き

一丁敷ふ子日 枕花 ぬやめ 七夕 菊

四糸子の星つみと云 侍ると云 花をぬと云 五

敷と月見おたの御城と御能を務る宵の言ふ

歳時并て正しく委枕上り立をひきつみ

一画り三の裡はむらと見ておハ明りり感

くつ一糸も忘また翌日甚く敷を打たれ甚御

横姫すれぬい何と云 敷敷り君はつれと御上意

よてあり一時的に表す中お糸とよをむらと上

くく花をともや樂屋への上彼ふをへたり

と花を星つみのぬハハハと三つをむらと

花をぬを當とふり上侍るより一糸ふりて幸

く敷小歳時糸と敷尊と今とても不絶已給急

らととと一糸お糸重ゆるとより一月とと哥及

お心をよき一糸の元氣を必風雅お心なくして

叶ふ一糸も事也強の文段つりすして法評

もくくおもおもくやと形お心つらむわんれ

は道知くさる事おまとも昔一老人の夜話有

一室予晝寝子曰朽木不可雕也下器よりをを後

さられたるさちと一呵了お一くくおわんれ

其の学老の息未だしてり。席子所合せさうく日本の
 道理を通りて家々の事よりくまたなひとまへ
 強し不源氏のでふをなを能く吞込へん皆口つら
 ぬへ一宰予畫いねらうくとりくの事ふよか
 けりて夫子の不構略はるけりてあさうく色未編
 花の夏摺子 （？）の事をきりてたりへとも
 然あうさる一とハさうくありさる一りくくや何道
 もくくしてよむ心也然の字心をとむへ一家うま
 の事を坊明すして遠き圃中も開放るもいこの
 事なる一是又ひとの心を人く能するうと一

論評
奉解

源氏を金瓶梅のこゝとハ一象予源氏の道理を
 明あうさる一やを茶神も表とるんあうさる
 つこのそれとなりれた次予源氏とて奇之
 其奇ふて其相儀の大切なる事ハ明か人揮て其
 日本此事を （？） 謝く （？） 相之又韓退之云宰
 予畫 （？） 寝奢侈を憎むの語なるん畫也畫也混
 雜 （？） 事ん

第五 病中倦夜

ぬ一法切不老婦付寝し云病有り打ゆきるぢふ
 一。家う才もやと倒きて今ある事乃やうよと記

世の中をうらみ侍りきり。志の阿世をうらみ。後
一首を故より

後乃世をかきけりとも一くそ

あゝ如猿ふし小虫の中一山

漏る沈む滴。障衣を絶又聽。東窓未生白。枕上
一灯青。右雲溪。元主病中侍病之吟。時今思ふ
少如

良薬甲、病魔を遁却す時

うゝ生る何をも去風上世を存

障絶窓志らく灯空一

才六挽詞竿秋、をス

父存在乃時ハ立子あみねるふゆひ。徳をつく
ををあせらる我孝とをあり。孝子法かふ海法と年ハ
泣きを地はけくぬき天をあふく。皆是孝子事ツロフふれ一
也。なとしてこのゆふ子信有ハ常にて。若と如くは
ハ信の据。そは福の源。あさあり。然る平位キをさ
るは信ありて。世に信ふゆき。されハ又其親をん
や。そま親とたおゆるをのへ面をおとも。にこそ我解り
信を解り。そまに似たり。只ん乃乃ふ。其常あり。こ
くそれ人をあつ。ほく。は家を識く。そ吾必信ありと
謂ん

欽哉

欽哉叔平の世に人とて家

才七 霄 露 堂

言 椒 膏 露 堂 者 靜 山 別 業 也 七 年 未 終 按 江 南

批 唐 塔 置 後 苑

堂 上 之 名 家 詩 大 家 及 大 禪 師 律 師 各 文 章 祿 前

著 術 術 此 冬 雲 一 文 章 未 了

道 長 塔 後 屋 唐 右 へ 言 高 椒 膏 露 堂

と 五 重 之 塔 道 行

堂 下 之 堂 堂 下 之 堂 堂 下 之 堂 堂 下 之 堂 堂 下 之 堂

如 玉 柏 茂 甚 之 庭 の 苔 衣 脱 も 言 如 も 志 之 露 ぬ

歌 吹 海 陸 務 親 治 之 八 操 を 以 之 之 誰 か 能 之 乎 琴 之 在 也 一 乳

憶 在 錦 城 楓 之 奇 吹 之 能 浪 在 江 乃 柏 の 舟 漕 も 以 之 乃 浪 也

歌 吹 海 根 之 之 之 浪 川 み 之 乃 水 の 面 此 以 之 之 浪 也 志 之

柏 舟 詩 乃 六 一 一 之 東 の 雨 晴 明 之 之 天 の 香 久 止 之 之 川 之 浪

荷 葉 詩 乃 乃 神 作 之 人 不 凝 塊 乃 老 之 世 ね 亦 亦 亦 亦 亦 亦

見 説 秘

石 凝 塊 日 本 記 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

石 凝 塊 乃

物理論

薜荔以下
客醉賦
まろ常子あまるとの香州ハ列。薜荔薇薜薜た

榛栗一
アアハハハ榛栗柿桐梓漆乃滴を載ふ。まろ此谷

江ノ賦
まろの谷
恋まねまねいひいひ。君代乃常盤能付乙女の神を

まろの谷
いかにたつむとととねのち七年は満ちる。君のま雨

まろの谷川
水よそそそまろのちの産るが

まろの代
ふくかまろく君く、まろかうま園めが碑石徒、君が礎石ハ

常盤
まろの代
母まろまろ。若熱を博し、まろを洒ハおのほり、松風を

まろの代
まろの神といふ、まろの匡房

まろの代
まろ風まろまろ。清南微を奪た。まろまろまろを亡し、

まろの代
まろを破る。まろを挫き、其銘

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

まろの代
まろを解き、まろを解き、まろを解き

且哲詩
ハ磨滅の口はくひあ。まろ人子代までまろ料はさく

石の鼓ハ
石鼓歌
四まろまろ。まろをまろ人。まろまろ。山吹乃く。石はく。ま

乃鼓のまろにまろ乃。まろまろまろ入る。まろ月や。まろく。まろ

るまろまろまろ。まろのまろ。まろ乃まろ。夜。まろの雨乃

衣樹ふりけ。まろへて。まろまろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

昔年功子橋山と云妓あり。万人肝を縮め朱
 唇を窺ふ。とやうり其重司畫せとも心張カシク攪
 める酒家の一吏平生涯の小候子志しうかひ傳く。
 或時其狐を佛に誘きて巫電をう。此も發も神も被も甚
 子使齒列裂みちのくれ方あんと顔は身をさう結結し
 秋風もたや吹さうへうくも乃其の

言其と重司重司志しう川の岸

とよみてとやうり切拂ひ山林ぬかく入るよ
 恩乃里人有かくたよいとてラシかたふれ
 くれハ

思ハ海下之

其く踏るそこ一ありれハ山里平
 其みそ衣幾件妙歌も

又

糸くけのむり一哉今も引うく

鬼乃そ字ハ海山色の望

鬼乃そ字ハ海山色の望
 へり。奇の風情ハとよもかくおも真乃ん葉葉歌言
 ねるさやうさくくもあうんと感さう。好く
 糸竹の昔とつふをそ。此も乃書となさんとよ
 ちうも。怪くあや一みるまハ必のる屋う山蜂

きんぐさハ
 形迹カタ景迹ケイ
 瓜のやうなやい
 瓜のやうなやい
 蜂媒 劉後特
 蜜口傳未好信通
 為花評品城東凡
 香段頭待花英去
 疑是纏頭利市紅

樹中の一僧
西林寺惠持禪師
木室三百歳
庐山志九

将相に至りて
仕官而将相而
歸故郷 右起語
喜でこれをおん
喜為天下道也
於是年書曰
永叔画錦堂記

物なり。是是花のよき評品。よき東風子娘。よ
せきよりこはらものさきんら石劉後持の輝煌の香
我下しきき花之陳以縣の樹中の一僧。三百歳後
盤を中して生臆を懐く又去。一語不言笑ハこ
ふハ年光乃移くさる物也。雨骨綿堂苑の造
物將相不。至る富貴ふしき後歌に耽り。永
叔の年光移るを辭をかるとも。パウく今此
静山老人の寢とあり。四面風色及ちり
くくく

才時廣法く書了於是乎書

才八 幸化不也ス

訪るあるを。それ坊に才哉用かきここのおと
あして。東平ハ改く。一妙。この智平たうく
み他。のこれけのよくとなく日教を口せれ謝語
味中。窓乃雨は千里の旅をんも冬。梅樹輝
ま露よと抄おあり。子。割古キ名をく家ハ抄を
朽くくらは家梳を。名香かす。おとくふひめを
ふを道乃泣を中して。得信をあん。風那の神の
初なる人。別文書よきと。かくてもとや乃
此の哉と也。一橋乃清風を流るり時これ夏

道の位
机心教ま
為家道位
行くは
其才ヲ

又集三

廿九 流斜主人に手紙

牡丹小獅子一体に新左。有非皆汗。流風を以て
と。謝子辞も早もつた。あつた。と。新屋を占つ
歸るとお見。洋尺別出立。美懐。後。接。府。と。丁。昔。親。仁
と。と。と。と。文。孝。余。り。面。白。光。又。社。子。原。一。口。現
先生へよう。く。あ。う。て。う。く。と。し

廿一日

廿十 甚。舟。より。志。業。を。務。む。事。の。時。五。子

此。作。京。の。男。を。さ。う。く。と。ま。さ。る。ゆ。え。に。稿。書。八。日。干。
あ。り。と。掛。子。の。む。と。け。と。ま。さ。る。ゆ。え。に。

廿十 甚。老。の。あ。ら。は。甘。く。一。腐。り。凡

礼を治也。愚到て吾也。人以齒落てて折るを志
らさ。世人。熟。凡。と。愛。る。と。の。意。く。石。凡。堂。以。之。也。
今日。厚。志。深。う。と。と。欽。表。や。と。明。く。て。物。心。して。丁
附。

廿十 浮。丹。寒。泉。へ。贈。 藜。ハ。先。考。休。斗。清。淨。念

年々之類也

ワ。の。わ。く。常。子。惻。と。と。て。武。陽。小。有。一。時。才。町。を。至
る。俊。事。り。如。名。小。座。一。く。披。き。え。進。え。句。あり

杜。宇。を。東。より。体。む。を。る。を。ち。り

白中溜あり

輓士六昔之
泥足同シ

和章騎馬
飲中八仙歌

三瓦両舎
妓ノ集ハ施
舎ノ水滸傳

後於に懐紙
名ヲ後ハミ
トシ

輓士鉄のこしく歌む。泥足りぢふふ八船よ乗れり也。
沈酔の一書くと独り。昔今三瓦両舎のな種
まつる松のちうらハ朽くて。又あつとすまて毎年回
しうた。四十歳ふとし。ちのちれたるりふれと出
り家とまを夜よりとずしらまらる。彼柳をう
そひり家おのぢりもやう。体中ともまぢりハさ
けり。ハの。ゆら垣根もとくふりうと。卯の花
のちるれたる子。ゆきまの。白子ハ真ありうと
漆は破てちをまを抱き。四時を下ならぬ。泥溜の

きぢめハ
なメ

達人。今誰をなう。居んや。時己ふ。ま。泉。流。きん
よ。春の道を。画して。又。新ふ。先人。好る。子。志。こ。う。ん
一節。月日の首を。り。よ。よ。と。して。あ。う。を。吞。声。を。放
て。ど。ら。め。あ。る。さ。う。ひ。と。を。字。ゆ。は。ま。表。文。の。ち。し。ま。き
泉

昔流らん画を回一むめのちりね

ちりね
は。祇。自。盡。積
き。奇

漱ふれ。月。め。き。こ。る。一。句。阿。ハ。種。ふ。品。く。う。如。下。ゆ。一。草
と。白。ひ。て。子。種。美。花。を。か。ち。う。り。う。ま。い。あ。一。へ。今。の
お。う。う。も。存。ち。う。ら。ま。て。ハ。世。の。上。人。の。真。体。も。こ。この
れ。な。う。う。志。く。ね。花。の。付。成。う。ふ。見。知。り。始。如。こ。花

心裡吹毛
禪法

との^悔あはれ心むけし。至って孝行の紫衣も
 耳たやその凝りたるを。中しく勤る家朝夕の心
 裏吹毛。常に磨すの一棧高く清く。徒小選^選にあなが
 ちよ柔に抱ひて。甚日そ表のねろそうたうぬき
 泉の風流。雪の環よ白花に光りを添へて。孤岡を
 破了。皇都を在りよ朽し。思也なうく。甚秋を厚の
 孝くふともあひ。家の日を兼へ。旨酒を置くと
 賓客小命。吾小室。霜茂けを侍て。松よるま
 ぶ。炎風をそらふの寒。泉別甘泉を。輝光^{輝光}
 耀^耀厥福を^耀とくする。ま^耀強く長く極りた^耀い。

輝光
 女極と云
 終り
 泉ニアツル文格ナリ

心
 女極と云
 終り
 泉ニアツル文格ナリ

中三白拍子之画讚

源のさねらけくへゆあそんとて海うりたる時り山
 崎を命とたふふけふもたあはるとよみ侍てさ
 ーうぬてあるハ女をふへー
 形々^形事^事法^法一^一転^転ま^まか^から^らた^たる^る乃^乃也^也

下ノ白ハ

なるらあわれのうきーくせん 志ろめ奇
 中三白大主碑前之文
 石を切石茂運ひ。此却圭子ら志家ーを新よ

筑末さきさき。化善乃いとなまこ。磯平羞鏡ぬ
きくひて。乃志ふう。いよくかた支ををを
ぬけん。やまう。まう。老安やまう。と境あふ
む。八の風。おとらう。建ぬる。何となく。神ぬ。是。徒
一

おとひ。うけ。あま。名。そ。家。の。玉。か。ハ

右葉月三日妙導招提子入る速く

才四 間脈之末と葉 留藏主

誰謂崔子角。あし角。あしは。牡子。花。老人。必。塗。ら
ん。角。小。牙。あし。一。牙。あし。ん。表。え。ん。援。ん。通。ま。り

後端 詩經

白羽ノ白 孟子

洞云先生。於子。飛。一。夕。子。飛。を。六。つ。れ。む。噴。を。取。り。て
ひ。月。ふ。ら。ち。梅。を。第。ふ。そ。白。き。る。白。玉。の。白。之。甲。ま。ま
ら。く。と。そ。き。る。こ。の。ハ。性。平。あ。く。白。羽。の。白。子。あ。く。は。
笛。屋。乃。笛。あり。引。老。人。乃。そ。や。れ。外。を。若。ら。れ。あ。ま
才。時。之。庵。の。お。し。法。ハ。甲。子。金。粉。を。塗。る。掌。中。小。愛。ま。是
ハ。唯。四。明。と。狂。あり。重。萬。を。以。酒。平。換。し。る。人。を
四。孔。字。を。名。法。也。年。を。持。て。引。こ。人。乃。報。花。ハ。別
笛。花。と。呼。ぶ。也。

ゆ。り。子。を。磯。乃。岩。屋。り。と。む。浪。を
い。く。や。一。波。花。か。こ。の。さ。ね。ん

と古人をよみたり。まほしく家深く稲音しく
神あり人わして年相長く。おかく業ん遊ひ成
る。や百北余をせんく。と

才十五 頼光綱小むらひ金札をけりて絵の讀
細立て鑑あり。いさのぬあう。と

此法積千餘
ヨリ傳りて
今皆列約月
はあり

清原人妻と。あふ山うら

頼光あひ咲

才十六 檜八口きり。傳る

道人兼元章。字架茂。字白三。業生花
自是才思日進。と鑑入。孝是茂好く。字の及り
あふ。けり。如文。画以名あり。才時。庵。字。尚。茂。は。う。一。如
一。茂。と。あ。ひ。法。寺。なる。好。く。好。い。と。あ。み。程。と。れ。休
の。傍。珠。を。焼。金。火。紙。照。り。一。ん。ふ。路。と。ま。ぬ。林。茂
は。く。れ。ハ。秋。も。文。好。是。を。愛。見。ハ。宋。人。富。の。た。り
て。世。好。く。そ。好。く。老。の。妻。風。や。ひ。急。り。事。事。毛
あ。る。一。様。ハ。檜。八。口。ハ。奇。矣。好。若。若。人
死。く。も。あ。る。一。ん。同。の中
み。は。く。き。の。鑑。を。才。乃。そ。ち。と。あ。て。あ。ふ。た。あ。ひ。く。ハ

と字紙をてて歌して。能因はうみく。固平きと
引く朝夕此岸をてて子そ有る。
以教師の信破益老人おアあれ

才十七 樽雪へ返事

山樸是弟
梅是兄
黄曾直
法吟く土つぎ葱粥りてん存を肥る信細き舞の
勤くも又を山樸と楽く才あふへ一三谷を有仏と傳
へてこれ

本城の脱く遊く福ぬかも

あく不用心とアわくある城の字れと独笑深海
甲新トト

才十八 武陽渭北に遣ス

東より幸ありと六時く信師へ。比度万句紙は
る板あくみちさうりと才あ。東福寺塔取乃門小
才く一字あり。是をおまひすと無くて智く
聖一と力く。屋乃若楓

長く通天橋と能法風をたてまへ。穴賢と

才十九 阿みこの松賛

小山僧都の堂平のありて。そやれ法とありて
光君乃あささうとゆふらちおも只小娘の事を
あきれとすれぬも謙有り始あり如持こり

物トといふ志トぬふト知トるト者ト也

才ト也 芭蕉トとト跡ト之ト論文

蕉翁雪見の句と粉骨又章之中。一も生涯に用可
上ふあらん。真直て不盡之。大道意はとも哉。朱英。其文
甚句尤真確。世道の重宝。其時危殆人と加ていさく
らと共平吹とんや。事ト也

之文更平下句平てそ有る

才ト也 雜話

桃徑ト
花ト也
後ト也
尻ト也

一江高の桃径也。近年後庭花盛平俗をさくし俗
を破る事目小痛く心よゆわくは抱た。中富ら仰と云

男ト之ト氣ト燭ト暫時を金千疋の價を以春宵をト壓トたり。世
人書成る價として只世老を帰る事浅き。大明律
云ト以ト陰ト莖ト放入人々ト糞門ト者ハ杖一百

此刑ノ放ノ字行要なりとて放とは可なり
云事可なり理業をすれハ杖一百との義志を
お射たんと杖不及は情むへ一放の字を下
云事暫時千疋を具圖不投者必杖一千。道
云と遊道といふはさうむへあり

一平先年ある名う崎と云。死おおんていふ事あるは
と迄の御悲情と云。死で後必一家の老とも事とも法

燕、
時、
各毒ノ各

お下りなすやうにたのみまるといふ事のみだみと
とつていふがもれこまをぬ也。不のぬなりといひ咲て別死
いふ事なり。ふ消ゆき去ゆ方へお話笑談の折なり
Pより進ん極て一家子口説あゝんその上理の好れなる
ん。どやう御志を流らまはる。口舌をけて一家和て
むつたうううの。後又笑談P傳りりれて早にぬな
らと語りあけもせま。やあうう。不のぬま。笑ある
時を能く切字之人お死。其言也善。東坡の燕、張建
對が時、是はハ方る。

一、西谷ふ入て。然坂長範甚社の室を奪ふの扱。扱

多の盜賊をあつてまて。長範いうおとひらん橋下
岩上休て。御山の雲並妙の光を感て。寺子入て
黄金を指すも。て四面を拜す。其此は奉名。指言ひ云永
誠徒此御山入。後後々御供養なり。志めやう。子頼
と換極を借つて。御山二枚うきて。生お死後のねとひ出
唯今いふ事。おとひらんせつる。

たつたの山。おとひらん。はらう。このんを。おとひらん。後此
強盜長範とま。はらう。おとひらん。も。悟る。いふ。や。おとひらん。
つて。おとひらん。なる。

ワレホメ
吾言

一元文之季三月二十日とせり予ハ延宝二年廿七純
 々一日を去る月を遊ふそつ文の身の人へなりなく
 其ふどねとめし世の人此衣もつり弁の花初音
 さつし橋ありひよとん 桐りろき涙ちりりめ
 となとつりつて再びありや。望の語ありく
 夏の字をわがむの句と。秋めをふなき事老
 してせり下之がし清水ち年福安して海路不麻を説て
 二之友喫菓遊談後作の折し。其句の花と云といひ出
 脚注を結ぶとやく小橋つりく決しと。涙と世のつれ
 詞家なとて殺さるるを懸へた也と。氣を結めん

を屈して来る予從來めく。控るも折事なれと
 も又心のまじくぬんねとりの種ありたりと替くお
 控。奇吹海ふ心の歌を流へ又ふとくこれ道もありたりと
 放蕩の日をさねぬ数やもあつと。死ねるも其合
 畫て別控府平ゆ。舟中又よつと其心もつりし
 と云ふ予てとく。去る一夜や中の語をわとる
 正しく夏のつと。朝良春をわたりと暫汗をく心暑
 し。追吹下ス四月の風も白ひたれ中ふ去る一夜く
 やし唱へ喚て垣序予入て漸ん静りたり。於是春中價
 鳴る自負よりいと心相り。おりりるき涙とたり

吾一夜録よいのりまねん神必其痛ハのり
る古今其例多し。市時叢句不怪む人。自他
あり。お推る而己。跡へき絵ならんを異と
もみねふ

遠く〜ぬ家むじ〜とねと〜きよ

老をいひけり涙流るんとてりよき

才三十七回忌よ帰るる句

秀鏡の如し先考十七回忌遠忌を移りて
のこけ海子月夜をぬくぬ涼〜とを
〜

昔も日やと〜も伴縁の右た

才三勸学歌

一胡雪路果然として下るハ松海危古
なり〜。ゆり〜とある〜。并を幸て
神の山流流此林を見す〜あり

暎ハムケレて云通子家て書を賞へ。世子富ハムケレととも名田を
賞て用る事なり。句中あり千鐘ありん
ハまことよ安ん志ハあれと

ふ〜書考なり〜飛苑此橋何〜ら

首孝保正一筆書之月仲院

湖照又

才四喚洞亭小遊ふと〜

元文二年十一月十日余。高岡氏後苑の楓葉いっ
 めく錦の屑を拾ひ。人々くおすといほさうべ
 海うけ群侍は。日暮兼池波を洗ひそは
 うせとなく静く流さるるまみち葉をうら川や
 かねたあみも澄くそわ。莫うかも莫とのしむ。濠梁今
 あ。高木も小流もをを打流さうせ 御製も今更
 ありく思おとけは妙なきさ。遊して流おとけを
 る雨のあけ流す軽く。二三度斗るあくまうして及照
 けきくく霞光もさうけり影。たき拍流すまかいら
 ふ似のまひんなき人ふも見えんやや。時一散流さる

莫樂
 濠梁ハ
 庄子秋水篇

朝ちうき初
 比ふ際おこ
 中院内云
 下署

丑常樂

いへくもあけ。木ぬうく桂海とせく山はさうく一簣
 咫尺ふちちてゆきさやも遠く原さうくまぬるん。け
 うはき一記あそあそぬ。ゆれ急流の勢流をか流さ
 せ下流海一もぬさもたさの昔めさうく。樂ハ充表
 子池上高岡子遊つきくを流さうく遊ひもあ。又の
 常のしへさく。平瀬河ううて庭のたハ下越さ
 ふ。さうくは。やもぬ。むし。舞。ああひく。感爾筆也
 笛成あうさあ。あう。かくあうハ。蕭を吹き志こして藤
 虫さるのさるさうく。む。南ハ和光梵宇。け鐘声時々持ゆ
 かせく。さうくえあ。海子六時堂のさうく。さうく空を通

梵ハ
 西はは地

ひくろ。西より速つきき家梅くあめうーた住長とて
わくく上久ぐれ。一うなうぬ雪お囀る。うううう。
お井乃夕暮。いうてそくふハヤシ

上畧
家とこはま
古の囀
徹事記

家とこはま
徹事記
お井乃夕暮。いうてそくふハヤシ

才七五 紀別戸田何某三回之一集

發疑^メ指^示
切^ハ人
蕭相國
世家

又本古衣乃暮秋花咲交けりも世の氣人のふ月の
雪いさうひふりけてほるの氣を。有日月の三秋は後
とら。おとよ平な疑して指^示不^誤人ありとは。翠^三人の
考ありくう紙

ツミヒラカ
一二

面上三年土
まの料又生
老杜

一二あり秋の存草乃花
面上三年土。秋風又白ひをくむ。山。里。芳。人
ちうく

才七六 書平たぐまうる人のまうへり

いし秋のほめ我筆。常考乃るふいん。か
く又恒あり。いそくといひをて。あう。ふとみ
の事え。九月十三日とのふ平。身は。さ
お道る跡の志かく。短さ。もの。方へ。は。く。平乃
屋て。ゆるれ。と。あ。く。て。ふ。子。孫。中。や。も。う。わ。か。く
まの。み。た。る。む。の。ま。う。ふ。な。さ。か。う。限。て。ゆ。ま。ら。し

此のよいひ包て。紙書の手をとりてさるく此一言
 二言。海は青に教古き文おも叶ふは言をいひ独
 せ。佛の心も海にまふをわりの一りさるくはまを
 を折。是れ我れ積めく人笑ひ草もいふも。花の思を
 おとつひ立ッ日も日般きまらる。たさきむつま時由
 ち。月影をぬく。龍りー海は志おく熱る水の
 程も。まへく。べき節の人あみたう。福も。廿のふ
 おとつひ乃。等者みつう。むさひく。目をとぢ。終く
 牙小傍を伝てても。盡る事あー。げぬも。きく。蟬乃
 羽のうたう。落き。濃た。とおとつひ。散りて。せ。あ。

旅中
 去陽
 不意

子とつふまの。なき。成力おも。押流は。宿も。境界不
 流。去く。掃く。あ。ま。や。う。や。う。か。申。子。落。家
 と。割。う。か。ま。る。家。壺。子。乃。ま。と。子。を。残。り。て。あ。く。な。登
 う。ん。ハ。ま。ま。ふ。う。か。ん。あ。か。卵。乃。花。の。洞。ま。あ。り。み。て。
 袖。喜。乃。曉。ハ。清。く。わ。う。あ。さ。る。と。又。ま。る。ま。を。あ。の。ま。ん
 ふ。ん。を。あ。ー。人。ハ。う。つ。た。誰。れ。此。境。ふ。あ。る。人。あ。る
 は。い。は。被。計。ふ。ま。ま。わ。ん。と。夜。そ。ん。か。う。ま。い。ハ。人。の。う
 き。を。引。流。や。折。ゆ。可。孝。の。書。ハ。か。く。空。ま。あ。か
 と。香。橋。庵。ま。あ。る。ま。あ。る。ふ。せ。ん。ま。げ。く。て。あ。ら。た
 傳。る。子。也。被。え。て。命。ふ。ら。ん。と。ま。み。さ。て。後。流

魂消

八桂

〇在

可一弁の心。はこもぬらく。神心くけ引さふん。
きふせは是まうく。居て。才まつ。福んよあうへ。家平
解き。洞如如と。阿く。おあするも。いひそへ。あひむき。ひて
ぬ。あ。あ。孤灯ふりて。信のま。私も。白目そく。指節て
壁く。若来し。きる。みを。後。五く。く。西して。ハ。何と。か
く。あう。せ。事の中。く。憎き。え。う。み。沈。これと。か。来
た。面。同。お。も。

お平克ておまひく。世は。花。松。梅

吾を云ひ
人と此の心
活潑其然
を扱ふ
後実又其の
一格おへ

然を。療し。むる。平。医。阿。我。う。一。宗。の。要。を。使。く
風。を。起。し。あ。う。我。す。ひ。く。ふ。夏。は。花。ハ。地。の。く。ハ。ぬ。ま。日

ハ。生。キ。月。死。ス。あ。ん。そ。ん。の。う。人。を。や

才七 林外老人へ贈る

茶。宗。因。本。林。外。る。人。嘗。は。茶。は。遊。て。至。精。至。好。人。
茶。序。を。設。く。光。陰。此。年。六。十。之。賀。阿。う。そ。賀。を。祝。登
平。別。後。六。十。六

亀乃も我引も龜井の水如春

才八 後東亭 泉境只情別業之 濱亭也

後。京。極。秋。風。也。合。の。空。も。切。ひ。の。ね。と。阿。は。連。ハ。西。平
う。た。る。な。り。り。り。ば。言。う。西。の。海。を。ほ。く。る。と。東。平。運。際。を
く。長。波。阿。ひ。く。さ。あり。北。平。存。の。松。連。を。と。あ。む。う

誦ノ御靈ハ 十ヤ 謠のみくはのさるを 前駐 追ふまゝ。ゆゑに 十ヤ 如月並に
伊弉諾之御
事 伊弉諾之御
道返大神ハ
泉門小塞ま
寸太神也
お所ノ橋ハ高
檜原也

て。二三夜三声眉を低き。多平海 信 へて。共平一可
必やいひ結ひて。子付と答ふ。げ時風を千景。暫く破
らるへ。道返の大神。さや。心を定神え。於是島也。臨確
島也。臨崖之
阜陸をひ
海賊

あは其事平の昔。其ふの今平。やう海。其時。風
各入月をぬうの記。愛一。朝日をおいで。見被え。了
危る存り。ハ。暫時。危あり。操。能。を。握。一。時。小
四時の強を。ほ。く。喘。て。重。お。り。て。外。ス

其く。名。大。星。守。護。ま。へ。一。家。家。幸。幸。亦。あ。ん
能。危。久。た。考。と。表。之。揚。江。之
二。寛。保。成。亦。子。文。下。流
身。九。門。生。之。能。人。句。り
夕。立。乃。而。を。若。子。め。い。う。り。切。那
若。子。乃。過。日。月。乃。融。の。と。一。民。皆。之。越。今

玄虚ハ海ノ
興ノ作者各

玄虚ハ海ノ
興ノ作者各

雨縮と云ハ
幽林五ノ記
下リ

も更るよ乃く民皆去き我居る。雷走り雨凝
るく人を撓む。雨なく雨縮。去そちりて
乃雪。山く積築く。人皆心成洗ひ清味を水
信の神かさねぬまうり。流士ハゆりて空を深
あくくあけ所深も海をり。市小別る深高
も茄子も百合も竹も。川麻の皓齒をのふ第へ
水様の柳変態遠ふゆき。家僕尻を高く低
く伏めひく。刈標干の滯^{シヤキ}まね波をぬきまを
く強を信りて室ハ信の風子白へを転りら
空くく及照甚志風のそめ清を配る一白を修りて。

昔娥皓齒
在樓紅と云

下く休遊
玉をゆ
茶花物語

きうち子而あて。晴てきく怒の字そく。此字
功あま。されし風言杜宇の句。唱の字我目あ
矢ひ別あま。ぬりたまけ山の言けまをりて。工業まらるま
このけ及の中人。只又子自暴自弃の人を憎む。仍て此
句をあてま。とあれえ連家句あなつみくを下子あへ

才三十一小野天神を納く跋 紀府

一軸く歌を綿城下く人。岡次高去清記名皓盤
逢文信心ちるく上新可。家作り方信。其く歌
就中若靈く御神徳常小感くをほひぬ。因以
清く紀府子信宿して安三之西君く句を乞を

了て合をて三吟と奇伝とを是を放てハ六儀の凡頌
吾月花鳥別神惠小叶也。神慮別六合可彌
らん是花を去て退て細めなり。中一原く松の操
たの事をと了てゆくとぬ

右全篇門人艸々庵雪川模寫之

淡々文集卷三終

凡花如雪存襟玉一り
四時の飛經を去るも
去る所文素を教はる
其時乞て彫る去秋
子ハ了る刻多白くを原

くぬきんしん川かき
雨土か花か舟かき
法書きのみりの
まをむかふに
舟のまのまみ雨

一
法

五
五
五

馬林

五

一三五

文貨堂誦諧書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同 後編

嗣出

同 藪句集

全

行脚集東東龜

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時菴高判拔書

边刻

寛保二年歳次壬戌十一月望

心齋橋筋北久太郎町南江入

浪速書肆

梁瀬傳兵衛藏版

